■研究発表論文

市民によるまちなかの共同農園の提案とその可能性について

The proposal and its possibility of cooperative citizen farm in the city

大澤　由希*　　林　まゆみ**

Yuki OSAWA　Mayumi HAYASHI

Abstract: We proposed the cooperative farming in the city which increases the communication in neighborhood between the residents, friendly feeling to agriculture and crop joy, and also investigated the possibility for that. As for the method, we surveyed the present situation mainly on an allotment farm in Kobe city about the problem and prospects. In addition, we really tried an action to manage the cooperative farm in a lecture of the citizen's course. Also we took a part and watched an action of the NPO to manage the cooperative farm in the city park, and inspected the result and issues. As a result, the allotment farm of Kobe city had a problem for continuation with the aging of a manager and the user. In addition, the long distances become the disincentive, too. However, we could understand that the actions such as events promoted interchange and continuation. The understanding for the cooperative farm and breeding of the will were seen in a high ratio by the program we offered at the citizen's course. At the cooperative farm in the city park, we could consider that a good location, existence of support and the coordinator are effective factor for continuation.

Keywords: *Citizen, in the city, farm, cooperative, community farm*
キーワード：市民，まちなか，農園，共同, コミュニティファーム

１．研究の背景と目的

（１）はじめに

近年，我が国では，安全な食料の確保への危機感や，教育効果，コミュニケーション効果など農作業を通じた多面的な機能の再認識が行われるようになり，「農」に対する関心が高まっている。農林水産省によると『市民農園は，平成5年度の1000余から，平成24年度の4000余まで増加しており，リクリエーションとしての場としての農に触れるニーズは高まっている。』[1] とあり，市民農園の発展的展開がうかがわれる。

市民農園に関する研究は数多くあり，松宮ら[2] による都市における住民主導型の市民農園研究や，古澤[3] による都市公園での市民農園の可能性に関する研究，河野ら[4] の「まちなか菜園」に関する研究などがある。これらは市民農園を活性化するための促進要因として市民による組織づくりや交流，また新たな場所の提案等を行っているが，いずれも来園者に区画を割り当てるものである。

一方，藤岡ら[5] は菜園付共同住宅居住者による農作業活動を通じた人のつながりや広がりを検証し，渡部[6] らは，コミュニティガーデンの活性化手法の要素として，「ちょい農」と言われる共同菜園のサポートやその効果について詳述している。これらはガーデン内の菜園活動を通じた地域住民間の連携や地域活動の活性化を目的としたものを検証している。しかし，農を主目的とした空間を対象とし，従来型の市民農園における分区管理や農家による指導ではなく，一般市民がより機会の多い身近なところで共同による菜園活動を行える仕組みづくりに論究したものは殆どない。

本研究ではより多くの市民が気軽に農を楽しめる仕組みの一つとして，「『まちなか（市街地）』の身近な場所で『市民が主体的』に楽しみながら『共同』で野菜作り活動を行う場所やこと」についての手法について検討することを目的とした。そのために，従来型の市民農園の現状調査や，実践的な取り組みとその経過観察等を通して，それらの今後の可能性や継続する方策について検証した。試行段階では上記の取り組みを「コミュニティファーム」と紹介して行った。

（２）対象地について

今回の研究ではフィールドとして，神戸市を中心とした農園や活動を中心に研究を行った。神戸市は，政令都市で，人口約 150 万人規模（2014）の阪神間の拠点であり，市街地である都心部と農のエリアがある近郊部が隣接している。

２．研究方法

（１）市民の活動場所の状況把握と今後の提案

まず，従来型の市民農園の現状について調査を行うこととし，神戸市における市民農園等，市民が野菜作りを行える場所について調査し，現状とその課題等について検討した。

１）神戸市内の市民農園へのアンケート調査

神戸市の市民農園の実態を把握するために，神戸市が HP で紹介している[7]市民農園，50 ヶ所に日常的な管理や取り組んでいるイベントの実態、課題等についてアンケート調査を実施した。

２）市内の農園の現状把握のためのヒアリング調査

この調査ではアンケート調査に加えて，より詳しい現状を把握することや，入園利用方式等，営利目的で設置された市民農園と，それら以外の市民や自治会，NPO 等が管理運営にあたって菜園活動を行っている事例に関して，その利用の実態把握等を行った。該当する神戸市内の市民農園や緑地として，a) 吹上園，b)神付けふるさと村，c) ひよどり台エコ農園，　d)桜木町市民公園，e)熊野ファーム，f)飛松中学校の農園，g) キッ ZOO 農園，の 7 カ所を対象にヒアリング調査実施した（2012 年 4 月－7 月）。

（２）まちなか共同農園の実現に向けての試行とその検証

１）共同での野菜作りについての実践

共同管理での野菜作りの問題点や可能性を調査するため，生涯学習講座の授業に参画し，共同管理による野菜作り（「コミュニティファーム」とネーミングした）を提案し実践した。1 班 8 人－9 人で 4 班ごとに植える野菜，管理方法，分配方法などについて

*　名古屋市役所
**　兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 / 淡路景観園芸学校

話合いや，共同での活動を行い，その経緯を参与観察，アンケート調査等により，活動の問題点や共同農園という提案がどの程度受け入れられるのかについて検証した。

2）地域の中での活動における共同管理

上の1）で試行的に行った取り組みが，実際に地域で活動する場合にはどのようになっているのかを検証するために，まちなか，共同，市民による主体的な農園活動というテーマを具現化している事例である神戸市兵庫区のキッ ZOO 農園おいて実際に参加していた地域住民へのアンケート調査，ヒアリング調査や参与観察を実施した。ヒアリング調査は，地域住民メンバー5名と，NPO の担当者1名を対象とし，これまでの経緯や共同での運営，栽培管理，今後の展開についてヒアリングした。さらに，2013 年春から秋までのキッ ZOO 農園の活動を参与観察し，その状況や課題等を考察した。それによって「まちなか」，「共同農園」，「市民主体型の活動」の今後の可能性を「分区園型」との比較優位を検証しながら，考察することとした。

3．結果

（1）市民の活動場所の状況把握

1）神戸市内の市民農園へのアンケート調査

これらの農園は，1982 年から 2004 年までの間，神戸市により市民農園の開設や運営に対する支援が行われていた。ただし，その後この支援制度が廃止されたことにより，神戸市が主体的な運営から撤退し，農家に管理運営の自立を促したため，農家は限られた時間と資金の中で継続して自らで運営をしている。

50 カ所にアンケートを送付，37 票の回答を得た。回答率は 74%でアンケートを送付した 50 カ所の殆どが都心部から離れたところにある。

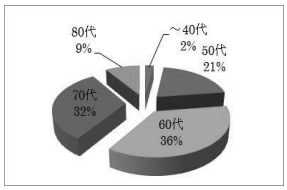
日々の管理運営や利用促進を行っている管理者の世代に関する質問からは， 60 代以上の管理者が全体の 77%を占めており，高齢化が大きな課題となっていることがわかる（図－1)。また，開設年数も 11 年以上が，73%を占めている（図－2)。開設してから，長期間を経ている市民農園が多い。農家が市民農園の管理のために行っている作業内容に関して複数回答で尋ねたところ，施設管理や清掃などのハード面，アドバイスや交流促進などのソフト面と多岐にわたっている（図－3)。

交流の一環として約半数の農園がイベントを実施しているが年1 回程度が 6 割である（図－4,5)。農園の問題点についての質問では，37 名からの複数回答の結果，利用者の確保が 19, 利用者の高齢化が 17，畑の管理不足が 12 と続く結果となった（図－6)．

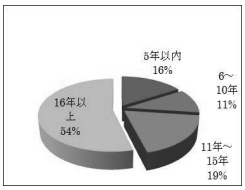
2）農園の現状把握のためのヒアリング調査

神戸市の HP に掲載されている市民農園の中で，代表的な大規模農園や，市役所におけるヒアリング結果から都市公園などの公共施設を活用した市民農園を中心にヒアリング調査を行った。調査を実施した 7 箇所のうち 4 カ所は個人が割り当てられた区画の中で自由に栽培活動を行う分区園型で，残り 3 つは農園を利用するメンバー全員が農園全体を使って栽培活動を行う共同型であった。 7か所行った農園のヒアリング調査では，以下の特徴が長所や課題として挙げられた（図－7-12)

表-1 に示すように，「分区園型と共同型を比較整理すると以下

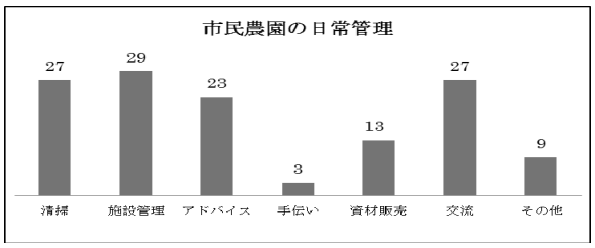


図－1　管理者の年齢

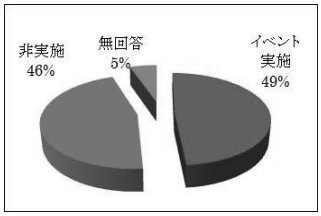


図－2　開設年数

（図－１複数人で農園を管理している所があり，N=44 となった）



図－3　市民農園の日常管理（N-37　複数回答）



図－4　イベント実施割合

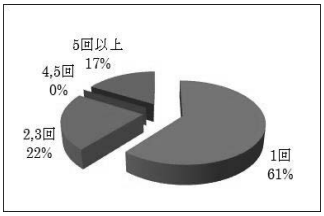
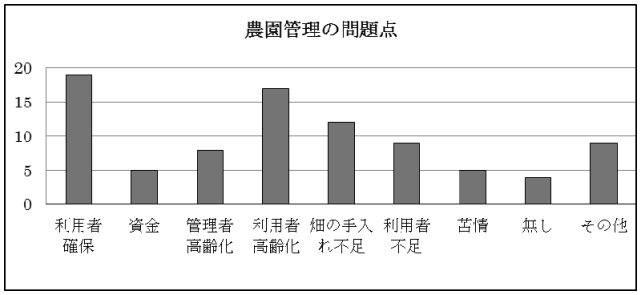


図 - 5　イベントの実施回数



図－6　農園管理の問題（N-37　複数回答）

図－7　ひよどり台エコ農園

図－8　吹上園

図－9　神付けふるさと村

図－10　熊野ファーム

図－11　飛松中学

図－12　桜木町市民公園

のようになった。例えば，交流に関して，分区園型では，イベントなどが効果をもたらすと考えられ（吹上園，神付けふるさと村）管理者が工夫を凝らして，コンテスト（吹上園）や里山づくり，そば打ち，講習会（神付けふるさと村）などが行われている。農家等によって管理が行われている郊外型の分区園はイベントの開催などが負担にもなっている。一方，共同型では，農作業や収穫自体が交流効果をもたらしており，親子，友人，地域住民間での

交流や学習の機会が持たれたり（キッZOO農園），共同で収穫した野菜の販売が市民グループの活性化につながったり（飛松中学），自治会による管理がコミュニティのつながりを生んだり（熊野ファーム）している。集客に関しては，郊外型の分区園では利用者の確保が大きな課題となっている反面，市街地にある農園は分区園型，共同型に関わらず多くの利用者が来園しており，大型団地内で順番待ちが生じているところ（ひよどり台エコ農園）もある。管理に関しては，分区園型では入園利用方式のため，契約により来園者が自己責任で管理することになり，管理上の大きな問題点は挙げられていなかった。しかし、ひよどり台エコ農園のようにゴミが放置されるなどの課題もあった。一方，共同型では，自治会で管理している中で，特定のリーダーに負担が偏る（熊野ファーム）などの課題もみられた。複数でコーディネーター的な役割を演じている場合は管理運営面では大きな課題は見当たらなかった。桜木町は，農園は休止状態で管理運営に関わる人材が見当たらなかった。農作業を行うという目的の達成度に関して，分区園型では，来園者各自で農作業を行うという目的意識を持って来園しており，それに対する不満は自己責任の範囲となり課題としては認められなかった。共同型では，市民グループの資金源として管理（飛松中学）されている他は，継続的な参加（熊野ファーム，飛松中学）や多数の参加（キッZOO農園）が見られることからも目的の達成度は高いと伺われる。分区園型，共同型を問わず，まちなかでの需要は高く，順番待ちや参加者数の制限をかけている実態がある一方で，居住地から離れた場所では利用者確保が課題となっていることや，共有型の方が，面積当たりの利用者数が多いことがわかった。また，イベントや利用者主体での活動，長期に渡る利用がコミュニケーションを密にするという，農園が家庭菜園とは異なる楽しみがある場所であることもわかった。

総合的にみて市街地内で共同型の農園は，集客力があり且つ参加者の満足度も高いと考えられるのではないか。

キッZOO農園は，まちなかの都市公園内でNPOやボランティアが共同で管理運営しながら，近隣の子供たちへの野菜づくりや収穫を提供していた。本研究が目的としている提案に最も近い形での「まちなかの共同による市民農園」と認識された（表－1）。

（2）共同農園の提案と取り組みについての検証結果

1）共同での野菜作りについての実践を通じた検証

一つ目の方法として，兵庫県立淡路景観園芸学校で開講されている市民講座の授業の中で，共同管理を「コミュニティファームを実践しよう」と名付けた提案を行い6月から半年間1班10人×4班のグループで話合いや野菜作りの作業等を行った（表－2）。年間を通じて，まず提案をし，畑づくりの考え方などの協議，土作りや堆肥作り，定植などの共同作業，今後の管理計画などの話し合いや，収穫から収穫祭の話し合いと実施などを継続した。その後行った共同の野菜作りの実践に関しての参加者のアンケート調査では，37票のアンケートを回収することができた。アンケートでは，「活動を通してどのような感想を持ちましたか？」といういくつかの問いに対して，「大変そう思う」の5から，「全くそう思わない」の1までの5段階で評価を得た（図－13）。その結果，イベントや作業が楽しかった，メンバーと仲良くできた，話し合いが楽しかった，収穫物が満足等共同作業で得られた活動に対する満足度は高かった。提案した「コミュニティファーム」の地域での実践に関しては，「立ち上げ予定」，「既存の団体に参加」，「立ち上げてみたい」，「既存の団体に参加したい」等が合わせて37%，「やりたいけど大変そう」が40%，「一人でやりたい」が3%，その他が20%と一定の割合で意欲を持った参加者が存在した。一方，コミュニティファームの立ち上げや運営の際にどのような支援が必要かという問いに対して3点満点で必要度を記載してもらった結果，初期整備の資金（22点）が最も多く，次にコーディネーター（19），栽培技術指導（18）等が続いた（図－14）。

2）地域での活動の立ち上げに関しての検証

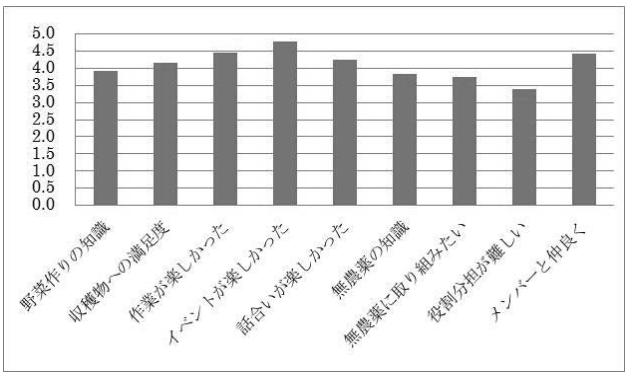
キッZOO農園は，戦前には神戸の中心地であった神戸市兵庫区にある新開地の繁華街に隣接する空地を利用して，まちなかの共同農園として利用されていた。その後，新たに都市公園内で再開している。地域の子供達が土に触れ野菜の成り方を学べる，食育をコンセプトに行われている活動であり，まちづくりNPOと地域住民が中心となって活動している。

NPOへのヒアリングからこれまでの経緯をまとめると，2004年9月にキッZOO農園の活動が始まった。半年ごとに参加する子供たちを募集し，毎月第1，第3日曜日に食育を目的に子供たちとの活動をしていた。毎回大勢の参加者が楽しんでいた。日常管理は近隣の住民がボランティアとして当番制で行っていた。

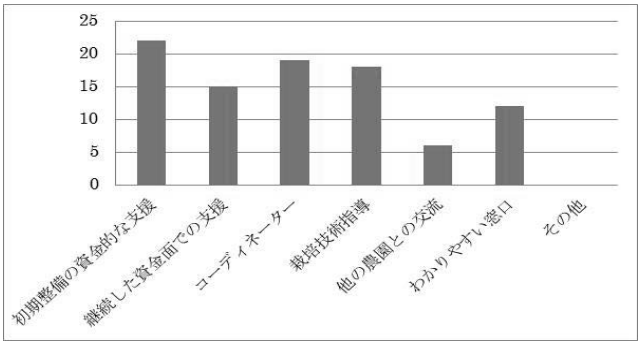
しかし，2009年12月にNPOとしての関わりが一旦なくなり，

表－1　ヒアリングした農園の概要

分区園型または共同型	名称	設立年	場所	地域	管理者	開設形態		規模	利用定員	区画	費用
分区園型	吹上園	1975	西区	市街化調整区域	農家	入園利用方式	長期利用者が多く，交流が活発に行われている．利用者の高齢化が目立つ．利用者確保が課題．	大	有	有	有料
	ひよどり台エコ農園	2004	北区	市街地	自治会	入園利用方式	まちづくり協議会が，手作りで設備を作った．環境配慮型．利用者希望者は定員を超えている．荒れた畑もある．	大	有	有	有料
	神付けふるさと村	2005	北区	市街化調整区域	農家	入園利用方式	利用者の自主的な活動（里山，そば）を園主が協力している．新たな活動者の確保，利用者確保が課題．資金面が課題．	大	有	有	有料
共同型	熊野ファーム	2001	垂水区	市街地	自治会	都市公園で自治会に貸与	自治会を軸にした地域住民組織で運営，共同での管理をしているが，リーダーに責任が偏っている．近隣住民が気軽に利用．継続的な活動．	小	無	無	無料
	桜木町	1990	須磨区	市街地	自治会	都市公園で自治会に貸与	市民公園を自治会で運営し，かつて分区園型の市民農園だった．現在再開に向けて徐々に整備中．コーディネーターが不在	中	無	無	無料
	飛松中学	2007	須磨区	市街地	市民団体	学校が市民グループに貸与	別の目的のボランティア団体が，中学校の空き地で活動，地域とは収穫物の販売時に交流．面積は狭いが，活動は継続的に活発．	小	無	無	無料
	キッZOO農園	2004	兵庫区	市街地（商業地域）	NPO法人	神戸市がNPO法人に管理委託	新開地の商店街の脇で，食育をコンセプトとして活動，ＮＰＯ，ボランティア，子供達が主な活動メンバー．面積は狭いが，利用者が多い．利用者の対応にボランティアも活用．他地域とも交流．	小	無	無	無料



図－13　活動に対する質問とその結果のポイント（N=37）



図－14　実際の活動で必要だと考えられる支援（N=37）

表－2　年間スケジュール

実施月	活動内容	成果
6月	コミュニティファームの提案	「具体的な活動事例の中でもやってみたい」「こんな場所でもできたら良いと思う」などの意見があった.
7月	畑づくりに関する肥料や薬剤に対する考え方や植える野菜についての話合い	話合いの中で,有機的な栽培や景観配慮などの項目について話し合ったが,定義が曖昧であったことや内容が漠然としていたため難航した.しかし植える野菜の話合いは,利用方法や栽培の手間なども話し合って決める事ができた.
8月	土作り,堆肥作り,育苗	休み中ということもあり、班によって参加者のばらつきはあった.
9月	定植作業,今後の管理計画についての話合い	定植作業は順調に行えた. 管理についての話合いは,収穫までに必要な作業を話し合った班と,誰がいつ作業をするのかという事を話し合った班などがあった.
11月	収穫作業（一部） 収穫祭についての話合い	収穫祭の話合いでは,量が決まらなかったが順調な話合いだった.収穫後の分配は,欲しい人が持ち帰っていたが特に混乱はなかった.
12月	収穫作業（残り） 収穫祭,まとめ	収穫した物は収穫祭で使用した.収穫祭の準備では普段控えめな人が活躍していた.収穫祭では,野菜作りの上での反省や,みんなで作業することの楽しさに関する発言が随所で聞かれた.

近隣住民が野菜作りを継続していた。2012 年 1 月には，貸借していた土地が売却されることになり，キッ ZOO 農園は廃園となった。これに一度でも参加したことのある人に郵送でアンケート調査を実施し（2012 年 3 月）140 通中 44 票の有効回答を得た。回答率は低いが，活動の感想として 5 点満点で質問を行ったところ「皆と一緒の活動が楽しかった」(4,6)，「野菜づくりの収穫物が楽しみだった」(4,3) などの項目の評価が 7 項目中最も高かった。

その後地域や近隣住民により，キッ ZOO 農園の再開を求める声が多く，再度 NPO が関わることとなった。神戸市から新たに市立湊川公園の一角を借り受けてキッ ZOO 農園が再開する運びとなった。2013 年 1 月より，準備が開始された。筆者らは，2013 年 1 月からの活動について，参与観察を行い，当農園の概要やその経緯，成果や課題について検証した。それによってまちなかの共同農園の可能性について考察を加えることとした（図－15）。

まず，広報，子供の募集，会計などの事務的なことは NPO が行い，イベントなどの企画や実施，栽培方法については NPO と地域住民で相談するという形をとった。また，日々の管理は地域住民が行うという役割分担がなされた状態で活動していた。月ごとに，子供たち（園児～小学校低学年）が集まって，農作業を行ったり,栽培に関する説明や害虫となる昆虫の話を聞いたりした。毎回大勢の参加者が集った。その経緯を表 - 3 に示す。

地域住民はボランティアとして活動しながら，栽培管理に携わり，状況に応じて収穫の分配も行っている。登録は約 100 名，実働部隊としては 10 名程度が農園に関わっている。成果と課題としては,NPO が適切なコーディネーター役となっていることで，運営管理については，NPO や地域住民との協議・調性がスムーズに行われている。月に一度の子供たちの活動日には参加者も多く，近隣での人気度は高い。毎回，畑作りに関連する活動やイベント的な事も織り込んでいる（図－15）。課題としては，野菜の収穫時期と子供たちの活動日が合わないことがあり，その調整が難しいこと，また間の時期に収穫された作物は，ボランティアとして関わっている地域住民に分配されているが，都市公園内の活動であることから正式な収穫の分配という位置づけではない。

４. 考察と展望

市民農園等の菜園活動は，他者との交流など家庭での活動では得られないメリットが数多くある。しかし既存の農園は管理者や利用者の高齢化，郊外型農園の利用者確保，イベント等の交流や

表－3　共同での野菜作りの実践内容と成果

回	月日	スタッフ NPO /地域住民	参加人数	内容（ねらい，詳細）	スタッフによる調整事項
1	5月26日	3名/5名～7名	33	**野菜の植え付けや収穫を体験する。**サツマイモの植え付け、スナップエンドウの収穫	役所と打合せ等，地域住民の募集，子供たちの募集，ニュースレターの発行，道具等の準備，畝づくり，野菜の準備，畑の土づくり，畑全般の管理
2	6月23日		25	**野菜の掘り取り，収穫、野菜作りと昆虫の話。**ジャガイモ掘り，キャベツの収穫,害虫のはなし，落花生の土寄せ	地域住民の募集，子供たちの募集，ニュースレターの発行，道具等の準備，畝づくり，野菜の準備，畑の土づくり，畑全般の管理，話題提供の準備
3	7月28日		23	**野菜の収穫，試食，地域間交流を体験する。**トマト・キュウリの収穫,淡路からの来訪者と交流，明石蛸を茹でる実演	地域住民の募集，子供たちの募集，ニュースレターの発行，道具等の準備，畝づくり，野菜の準備，畑の土づくり，畑全般の管理，淡路からの来訪者との調整
4	8月25日		中止		地域住民の募集，子供たちの募集，ニュースレターの発行，道具等の準備，畝づくり，野菜の準備，畑の土づくり，畑全般の管理
5	9月22日		18	**野菜の植え付け，播種を体験する。**ジャガイモの植え付け，ホウレンソウ，コマツナ播種	地域住民の募集，子供たちの募集，ニュースレターの発行，道具等の準備，畝づくり，野菜の準備，畑の土づくり，畑全般の管理
6	11月9日		28	**野菜の植え付け、試食、植物を用いた工作を体験する。**ラッカセイの収穫，ラッカセイの試食，芝ボウヤ作成	地域住民の募集，子供たちの募集，ニュースレターの発行，道具等の準備，畝づくり，野菜の準備，畑の土づくり，畑全般の管理，試食会，工作の準備
7	11月24日		25	**野菜の収穫、芋焼き、参加者による交流。**サツマイモの収穫，焼き芋大会,交流	地域住民の募集，子供たちの募集，ニュースレターの発行，道具等の準備，畝づくり，野菜の準備，畑の土づくり，畑全般の管理，焼き芋大会の準備、交流会の準備

図－15　キッ ZOO 農園（左は 2004 年までの活動，右は現在）

研修の負担等様々な課題があることが検証された。一方実践例からは「共同」作業による菜園活動は，豊かな交流と相まって人気の高さが伺われ，将来の可能性が示唆される。分区園型や共同型に関わらず「まちなか」の利便性はヒアリング等からも考察された。また，キッ ZOO 農園の例にみられるように，「市民主体」による管理運営が活発な交流や農園活動の体制を支えている。これらから,このような取り組みの仕組みづくりは有効と考察される。

生涯学習やキッ ZOO 農園等での調査を検証すると，提案した共同型の農園では，意見を集約するコーディネーター的存在の確保が推奨される。初期整備の資金確保も課題でもある。また，まちなかでは，以前のキッ ZOO 農園の例にも見られるように，民間の土地の貸借は不安定な部分もあり，都市公園などの公共的な空間の一部を活用することも，一つの手法として展望される。しかし都市公園法では担保されている分区園としての活用も，収穫物の配分方法など運用上の課題がある。今後はこのような取り組みを，幅広く検証していきたい。

引用文献

1)http://www.maff.go.jp/j/nousin/nougyou/simin_noen/zyokyo.html/2014.12

2) 松宮朝（2006）：都市における住民主導型の市民農園の地域的展開，愛知県立大学文学部論集 54, 151-170

3) 古澤達也(2014)：都市に「農」を呼び戻す，公園緑地 74(4)8-13

4) 河野誠他(2014)：「まちなか菜園」を事例とした都市型農園の現状と利用者ニーズの特性に関する研究，ランドスケープ研究 77（5），433-437

5)藤岡泰寛他（2010）：都市近郊農地を活用した菜園付き共同住宅居住者による協調的環境管理と交友の広がり-菜園付きコーポラティブ住宅「さくらガーデン」の事例研究-．日本建築学会計画系論文集 651，1007-1016

6)渡部 陽介（2014）：カシニワ制度に基づくコミュニティガーデンにおける公共性の変化．ランドスケープ研究 77(5)，713-718

7) http://www.city.kobe.lg.jp/life/others/farm/2014.8